

268 g で出生した男児の診療と NICU 入院中の親子の関わり合いの重要性について報告

本研究会の研究チームメンバーである有光威志（慶應義塾大学医学部小児科 助教）らのグループ（若林大樹、玉岡哲、高橋萌、飛弾麻里子准教授、高橋孝雄教授、慶應義塾大学医学部小児科）は、慶應義塾大学病院小児科にて妊娠 24 週に 268 g で出生した男児に対する診療内容の詳細とその効果についてケースレポートとしてまとめました。また、NICU 入院中の親子の関わり合いについても記載し、低出生体重児の診療やケアにおいて、親子のあたたかな関係性の発達を支援することの重要性を報告しています。このケースレポートは、スイスのオンライン科学雑誌『*Frontiers in Pediatrics*』に掲載されました（掲載日：2021/2/3）。

■ 論文情報 -----

Intact survival of a marginally viable male infant born weighing 268 grams at 24 weeks gestation

Takeshi Arimitsu, Daiki Wakabayashi, Satoshi Tamaoka, Mona Takahashi, Mariko Hida, Takao Takahashi

Frontiers in Pediatrics, 8, 628362, 2021. URL : <https://doi.org/10.3389/fped.2020.628362>

■ 症例報告の内容 -----

新生児医療の進歩はめざましく、日本において 1000 グラム未満で出生する超低出生体重児の救命率は最近では約 90%とされています。一方、300 グラム未満で出生した児の救命率はいまだに低く、特に男児の場合、超低出生体重児の救命は女児に比べて格段に難しいものがあります。当時のアイオワ大学のデータベース The Tiniest Babies (<https://webapps1.healthcare.uiowa.edu/TiniestBabies/index.aspx>) によると、過去に世界で出生体重 300 グラム未満で生存退院した児は 23 人ですが、そのうち男児は 4 人に過ぎず、男児の救命は女児の約 6 倍難しいと言えます。その理由はまだ推測の域を出ませんが、男児では肺の成熟が遅いことや酸化ストレスに弱いことが一因と考えられています。今回報告した男児は、妊娠 24 週に 268 グラムで出生し、minimal handling を心がけ、呼吸循環管理法や栄養管理に細心の配慮を重ねた結果、大きな合併症もなく他の赤ちゃんと同じように自分の力でミルクを飲むことができるようになり、3238 グラムで退院しました。NICU 入院中の積極的な親子の関わり合いは、母乳栄養、合併症のリスク軽減、親子の愛着形成の促進に寄与したと考えられます。

■ 研究の内容に関するお問い合わせ -----

慶應義塾大学病院 小児科

助教 有光 威志（ありみつ たけし）

TEL: 03-5363-3816 FAX: 03-5379-1978

E-mail: arimitsu@z8.keio.jp

<http://pedia.med.keio.ac.jp>